

平成 29 年 1 月 25 日

学位論文審査並びに最終試験結果報告書

大学院心理科学研究科長 殿

主査 坂 野 雄 二



副査 中 野 倫 仁



副査 富 家 直 明



副査 館 農 勝



このたび 安 藤 孟 梓 にかかわる学位論文審査並びに最終試験を行い下記の結果を得たので報告する。

記

- 1 学位論文題目 性別違和を持つ Female To Male 当事者における精神的健康と QOL に関する研究
- 2 論文要旨 別 添

3 学位論文審査の要旨

性別違和（Gender Dysphoria : GD）とは、性自認と指定された性の間に著しい不一致が生じる精神疾患である。GD 当事者には、他の精神疾患を高率で併発する、QOL が低下する、自殺未遂が多発するといったことがこれまでに指摘され、非薬物療法として心理療法が推奨されているが、GD 当事者のストレスに代表される精神的健康問題や QOL に関連する心理社会的要因はいまだに解明されていない。また、GD 当事者、とりわけ、我が国に多いとされている、生物学的性別は女性であるが性自認は男性である Female To Male (FTM) 当事者が経験するマイノリティとしてのストレスの実態に関しても、我が国では基本的情報が乏しい。

本論文は、マイノリティストレスと対処行動に焦点を当て、FTM 当事者の状態像に関する基本的情報を収集し、その質的検討を行うとともに、FTM 当事者における精神的健康に関連する要因を評価する方法を開発し、QOL に影響を及ぼす認知的要因を実証的に明らかにしたものであり、6 章から構成されている。本論文の概要は以下の通りである。

第 1 章、および第 2 章では、性的違和を持つ成人の当事者に関連する諸概念、治療法、心理社会的要因、マイノリティストレスに関する従来の研究を展望するとともに、そこから、①我が国では、FTM 当事者の状態像が明らかにされていない、②FTM 当事者のマイノリティスト

レッサー、およびコーピングを評価する尺度が整備されていない、③FTM 当事者のストレスと QOL に影響する認知的要因が明らかにされていない、④それらの要因を合理的に説明するモデルがない、という 4 つの課題を整理し、それらを解決するという目的を達成する本研究の意義が論じられた。

第 3 章では、ICD-10 に基づいて性転換症、または性同一性障害と診断されている 20 歳以上の FTM 当事者 22 名（平均年齢：29.40 歳、 $SD = 5.40$  歳）を対象として、自由記述によって FTM 当事者が感じるマイノリティストレス、およびマイノリティストレスに対するコーピングについて調査を行い、その分析結果がまとめられた。その結果、マイノリティストレスには、女性の特徴に対する嫌悪や治療そのものに関連する問題といった治療や症状に関する内容、および、カミングアウトに関する問題、他者からの不理解によって生じる問題、他者から女性として扱われる問題、恋愛に関する問題等、社会的背景に基づいた内容、対人交流に関する内容が含まれていることが明らかとなった。一方、コーピング内容については、サポートの活用、男性に近づくための努力、対人場面や性別を提示する状況の回避、感情調節、認知の変容といった内容のあることが明らかにされた。成人の FTM 当事者の特徴が明らかにされている。

次いで第 4 章では、第 3 章で明らかにされたマイノリティストレス、およびコーピングの特徴を客観的に評価することのできる自記式質問票の開発を行い、サイコメトリックな検討を行った。第 4 章には二つの研究が含まれ、前半では、ICD-10 に基づいて性転換症、または性同一性障害と診断されている 20 歳以上の FTM 当事者 71 名（平均年齢：27.48 歳、 $SD = 5.48$  歳）を対象として、FTM 当事者のストレスを評価する 5 因子構造 19 項目からなる自記式質問票が作成された。また後半では、ICD-10 に基づいて性転換症、または性同一性障害と診断されている 20 歳以上の FTM 当事者 81 名（平均年齢：27.85 歳、 $SD = 6.18$  歳）を対象として、FTM 当事者が経験するマイノリティストレスに対するコーピングを評価する 4 因子 18 項目からなる自記式質問票が作成された。いずれもサイコメトリックな検討を加え、信頼性と妥当性のある尺度が作成されている。

第 5 章では、マイノリティストレス、ストレス反応、コーピング、認知的評価、そして QOL がどのような関係にあるかを、ICD-10 に基づいて性転換症、または性同一性障害と診断されている 20 歳以上の FTM 当事者 87 名（平均年齢：27.83 歳、 $SD = 6.08$  歳）を対象として調査を行い、それらの変数の関連性を多変量解析によって明らかにした。その結果、①マイノリティストレスに対する回避行動がストレス反応を増加させ、QOL の低下を招いていること、②性自認を隠すことがストレス反応を増加させていること、③ソーシャルサポートがストレス反応の緩衝要因となっていること、④マイノリティストレスに対する認知的評価では、影響性を強く評価するとストレス反応が強く、QOL の低下を招くこと、⑤コントロール可能性を強く感じるとストレス反応を低下させ、QOL が向上すること、⑥ストレスの理解の仕方を修正することが精神的健康の改善に有用であること、などの点が明らかにされた。そして第 6 章では、上記の成果を受けて総合的な考察が行われた。

性的マイノリティ当事者のストレス、その対処方法、精神的健康に関連する要因を明らかにした研究は本邦では数少なく、研究の着眼点は申請者のオリジナルなものであると言える。ま

た、本論文で作成された FTM 当事者が感じているストレスと当事者が行っている対処行動の特徴を評価することのできる自記式質問票は本邦で初めて作成されたオリジナルな研究成果であり、今後の臨床場面での活用が期待される。さらに、FTM 当事者への援助を行っていくとき、心理社会的要因としてコントロール可能性の増強や影響性の評価の低減といった認知的介入の有効性を示唆した点も本論文のオリジナルな成果であると言える。性同一性障害患者に対する臨床心理学的援助の着眼点を明らかにするとともに、当事者の適応と QOL の向上に寄与する知見を含んでいる。

論文の構成、追加の考察、記述内容に関して予備審査の段階において指摘された意見に対しては、真摯に適切な加筆修正が行われている。また、研究実施の方法論、解析の方法論においても問題は認められない。

以上の点から、本論文は課程修了による博士（臨床心理学）の学位取得に十分相当するものであると判断した。

#### 4 最終試験の要旨

最終試験では、学位論文の内容に関する質疑応答を行うとともに、申請者のこれまでの研究業績を精査した。学位請求論文の内容を中心に、大学院在籍中に日本性科学会誌に原著論文1編の他、論文2編、国際学会発表3編、国内学会発表12件、その他連名発表13編（内国際学会3編）と積極的に研究の成果を公開している。積極的に研究活動に従事していると判断された。さらに、外国語を含む専門的知識と技術に関して口述試験を行った。その結果、申請者は研究を遂行する能力が十分にあるとの判断に至った。

以上の結果 安 藤 孟 梓 は博士（臨床心理学）の学位を授与する資格が ある もの  
と判定する。 ない